京都大学言語学研究 (*Kyoto University Linguistic Research*) **31** (2012), 211–219

朱曉農（著）《語音學》

北京：商務印書館、2010年、3+365pp.

鈴木博之

1　本書の構成

本書は著者が1980年代から2009年までに発表してきた一連の音声学に関する論考を基礎に、アジアの諸言語、特に漢語（中国語）に見られる現象を中心に据えて設計された一般音声学の教科書である。全11章に分けられ、これにまえがき、目次、参考文献、同書で引用した録音資料に対するクレジット、音声学術語の漢英・英漢対照表、あとがきが加わる。全11章の見出しの和訳は次のようである。

1. 序論
2. 音波
3. 発声
4. 調音部位
5. 調音方式：共鳴音
6. 調音方式：阻害音
7. 気流のメカニズム
8. 母音
9. 声調
10. 音節学概要
11. まとめ

以上のうち、第1章の序論、第10章の音節学概要および第11章のまとめを除いた部分が音声学の教科書としての核心部分をなしているといえる[1]。それぞれの章でで扱われている内容の概要は次のようになる。

第1章には本書の理念と構成を理解するうえで鍵となる内容が含まれており、特に2節の術語の体系、4節の音標文字の項目は本書の根幹をなす考え方が反映されている。第2章は音波の物理学的特徴の解説が主な内容であるが、5節に音声分析ソフトPraatの使用法が簡潔に解説されている。第3章から第9章にかけて調音音声学を中心とした記述が展開される。

[1]著者も言うように (pp.31-32)、第10章は音韻論に数えられる分野の内容である。

第３章では発声についての詳細な記述が行われ、本書において最も多くのページ数が割かれている章である。喉頭の構造の解説に始まり、発声類型についての詳細が記述され、特に 3.3 節および 3.4 節 (pp.74-76) では第９章、第 10 章の記述に関連する見解が示してある。また、４節から７節にかけてさまざまな発声の具体例が解説されている。特に６節のきしみ音に関する解説と７節の仮声（ファルセット）の解説が詳細である。８節では「弛緩/緊張」という用語と発声の諸相の関連について詳述されている。

第４章では調音部位および調音動作の解説が的確な用語を用いて行われている。また、３節には調音部位の難点が提示され、3.2 節 (pp.124-126) に [ʃ] と [ɕ] に関する指摘がある。

第５章では共鳴音の調音方式が解説され、共鳴音の分類に続いて鼻音、接近音、側面音、r 音の記述がある。

第６章では阻害音の調音方式が解説され、阻害音の分類に続いて摩擦音、閉鎖音の記述があり、その次にその他の子音としていくつかの複合的な特徴を持った事例（前鼻音、長子音など）の記述がある。

第７章では非肺気流によって産出される音が扱われ、吸着音、内破音、放出音が解説される。最後に、これらの音が漢語でどのような名称で呼ばれてきたのか整理した一覧表が付されている (p.230)。

第８章では母音について記述されている。２節の舌位置と音声記号の解説に続き、３節では母音の音響音声学的分析の事例が提示され、４節で鼻母音、摩擦化母音、舌尖母音、r 化母音などの調音に関する二次的特徴が詳述され、５節では無声化母音、息漏れ音、きしみ音、長短などの発声に関する二次的特徴が詳述され、６節では多重母音の構造について解説がある。最後に、７節で北京語の母音組織について音響音声学的分析に基づく記述が行われている。

第９章では声調についての概説とともに、２節で音響音声学的な声調の研究方法が詳しく紹介されている。３、４節は声調を発声に基づいて３つの域に分け、かつ各域ではピッチの高低を四度で記述できるという新しい声調分析のモデルを提唱している。

第 10 章における「音節学」という用語は、著者の独自の観点に基づく造語である。本章では漢語を具体例として説明されている。音節学の内容を要約すれば、音節を構成する諸要素およびそれらの組み合わせを包括的に記述するのを基本とすることにあるといえる。

以下、評者は本書評において主に第２章および第 10 章以外の記述について述べることにする。

2　本書の意義

本書は、著者がまえがき〈自序[2]〉で述べるように、音声学の教科書として設計されたものであり、中国の読者が自ら接する漢語に基づいて一般音声学を学べる一方、中国国外の読者も通常学ぶ音声学の内容よりも一般音声学の内容が豊富であることを知ることができるという目標を掲げている。

本書の大きな特徴は、これまで中国で出版されてきた音声学の教科書の中で、最も多くの中国国外の文献を参考として書かれているところである (pp.342-352)。特に Ladefoged (2006) や Laver (1994)、Ladefoged & Maddieson (1996)、Maddieson (1984) など主要な著作を踏まえ、かつそれらから適宜資料を引用しつつ、著者独自の見解を示している。本書の基本的な内容は大部分が雑誌などに掲載されており (pp.344-345)、それらを有機的に結合させたものが本書であるといえる[3]。著者の本書の執筆動機の１つは、ヨーロッパの諸言語をもとに成立・発展してきた国際音声字母の体系への批判[4]である (p.17, pp.362-363) が、それをただアジアの諸言語の事例に基づいて展開するのではなく、なぜ国際音声字母の体系では不十分であるのかということを明確にかつ論理的に記述している点で、著者の主張は説得力を持っている。

漢語を母語としない人が本書を読むことで学べる内容は類書に比べ格段に豊富であるが、評者は中でも次の２点を特に取り上げたい。

1. 漢語による音声学の術語の明確な定義

2. 国際音声字母 (IPA) が含む問題の提起とその解決法

著者の言う一般音声学とは IPA の解説でもその実践的使用法でもなく、世界の諸言語に存在する豊富な音声現象を記述するものと理解できる。一般音声学に対する有意義な新発見という貢献は、その音声現象を記述できる枠組みおよび音標文字が存在すること、そして、それを正しく理解し明確に発信できる術語が存在すること、これらによって達成される、と著者は考えている (cf. p.337)。

以下、先に述べた２点をそれぞれ解説することにしたい。

[2]本稿では、原文の漢語の名称・用語を引用するとき、地の文との混同を避けるため、〈〉でくくって示す。日本語の用語などは「」でくくって示す。

[3]各論文の初出は参考文献 (pp.344-345) に示されているが、著者の論文集である朱曉農 (2006) に採録されているものも少なくない。

[4]国際音声字母が特定の音声記述にとって不十分であることは指摘されうる。Canepari (1999) はイタリア語諸方言の記述のために新しい音声字母および体系を提供している。

2.1 漢語による術語の定義

漢語における音声学用語は漢語の中で定着しているものも定着していないものも存在し、きわめて複雑な様相を呈しているため、漢語母語話者でも戸惑うところがある。これを本書では余すところなく記述し、明確な定義を伴う新たな用語を確立させている。特に発声態と子音の調音にかかわる用語[5]はほぼ全面的に書き換えられている。

各用語はそれぞれ該当する章で取り上げられているため、参照に便利であるとは言い難い。しかしながら、それぞれに命名の根拠と意義が解説されているため、十分な説得力がある。新たな用語を定義する際の基準としては、国際的な慣例とみなされている英語で書かれた音声学の記述を参照し、それに基づいて漢語の用語を定めている。1つ例を挙げておくと、[k, g] の調音位置による名称は、日本語では「軟口蓋音」、英語では velar と呼ばれるが、漢語では〈舌根音〉と呼ばれてきた。これに対し著者は、1) 解剖学上部位が誤っている[6]、2) 被動部位によって名づけるという国際的な慣例[7]に反する、という2点を理由に挙げ、〈軟顎音〉を術語とするよう提唱している (cf. p.113, p.337)。このような視点で漢語の用語を一新したのは至極妥当なことであろう。

このことは、漢語で記述される音声現象がそのまま英語の用語に一対一で翻訳可能であることを意味する。このように用語を厳密に規定し国際的にも通用する形をとることによって、誤解のない音声記述が可能になるわけであり、それにより記述の信頼性も高まることになる。それに伴い、漢語で書かれた音声学関連の報告もその内容を国際基準で判断することが可能になるだろう。

また、本書の提供する音声学術語の漢英・英漢対照表 (pp.354-361) は、網羅的でないのが残念であるが、用語事典として極めて有用である。

なお、第1章において [ʌ] は〈次低央元音〉とされている (p.18) が、第8章では舌位置として〈低央〉に配置されている。〈次低央〉は [ɐ] の舌位置を指すと考えられることから、p.18 の記述は誤りであるといえ、[ʌ] は〈低央元音〉と呼ばれるべきものである。

---

[5]主に口腔内の調音位置に関する漢語による伝統的な名称は《方言調査字表》(1981:81) などに一覧表として記載されている。

また、用語以前の問題として、漢語の〈国際音標〉は「国際音声字母 (IPA)」のことを指すものとして理解されるが、文献によっては IPA と異なる音標文字を含む体系を〈国際音標〉と呼んでいる（孔江平等 (2011:289) など）。このようなことは最も基本的な事項として正しく認識されなければならないが、本書ではこの問題点が指摘されていない。

[6]漢語の〈舌根〉は日本語と同様咽頭壁と平行する舌部を指す。

[7]ただし、この慣例にも問題があることを、張慧麗 (2010:659-660) が本書を批判しつつ論を展開している。しかしながら、本書が提示する命名の原則 (p.8) に関しては張慧麗 (2010:660) も同意しているため、調音法の命名はさらに拡張が必要であると理解できる。

2.2 IPA の含む問題

IPA が含む問題点は本書の随所で指摘されているが、もっとも端的に示しているのは第 1 章 4 節 (pp.17-21) で、シナ・チベット諸語の研究に必要不可欠な音標文字、子音表、符号類、超分節音の表記法に不備があると指摘している。これらを詳しく解説しているのが第 4 章から第 8 章までである。なお、シナ・チベット諸語の研究に不可欠な音標文字として著者が取り上げているのは次のとおりである。

ʈ：「前部硬口蓋無声閉鎖音」
ɖ：「前部硬口蓋有声閉鎖音」
ɲ：「前部硬口蓋鼻音」
ᴇ：「前舌中母音」
ᴀ：「中舌低母音[8]」
ʝ[9]：「摩擦化母音」
ɿ：「非円唇非巻舌舌尖母音」
ʅ：「非円唇巻舌舌尖母音」
ɥ：「円唇非巻舌舌尖母音」
ɥ̩：「円唇巻舌舌尖母音」

これらの音声記号は、漢語以外の言語の記述にも必要とされる。鈴木 (2010) ではカムチベット語の例について、[ʈ, ɖ, ɲ] の必要性を主張している。[ᴀ] は林向榮 (1993) が四土ギャロン語について、鈴木 (2011a) がカムチベット語 Zhollam 方言について用いている。

第 4 章では、子音の調音部位と以上に掲げた子音を含む音標文字を記述している[10]が、歯から前部硬口蓋にかけての調音位置〈中齦區〉を 8 種に分けている点が特筆に値する。いずれも漢語方言の音声記述に必要とされているものである。加えて第 7 章では非肺気流による発音すなわち吸着音、放出音、内破音について扱われているが、これらは漢語の用語が定まっていなかったため、用語が再定義され、音響音声学的分析が行われている。

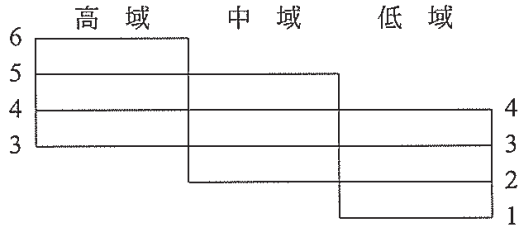
[8]本書評 **2.1** 最後の段落を参照。

[9]評者の現段階の執筆環境 (TeX) ではフォントが設計されていない。

[10]第 4 章で言及される舌唇音 (p.117) には若干の疑問がある。舌唇音の記述を行っている内藤 (2011:27) では、[b̪] や [v̪] と記述しているが、本書では Ladefoged が用いている記号として [t̪] を引用し、下つきの波線は IPA ではきしみ音を表す、と解説している。ここには 2 つの問題が指摘されよう。1 つは Ladefoged によって記述された記号を用いた文献を評者は見出すことができておらず（加えて本書が Ladefoged のどの著作に基づいてなされた記述であるのかも不明）、IPA に定義されている記号を他の用途に流用したのかが不明瞭である点、もう 1 つは舌唇音を表す際の音標文字は内藤 (2011:27) のように唇音＋付加記号を用いるのが正当か、それとも歯音＋付加記号を用いるのが正当か参照すべき文献がないことである。

第８章では母音が扱われている。この中では基本母音とともに先に掲げた母音についても音標文字のほか具体的な記述と解説がある。また、二次的調音をはじめとするさまざまな付加的現象にも言及し、「緊喉母音」についての解説 (pp.258-261) もある。

第９章では声調が取り上げられるが、IPA の記述法ではなく、中国で最もよく行われている１～５の五度制に関する記述と、音響音声分析の方法が提示されている。同章３、４節では第 10 章で詳細に検討される音節学の概念を導入し、発声に基づいて高域・中域・低域の３つの域に分け〈分域〉、各域を四度で記述することで十分とする独自の考えを述べている。これを模式図で示すと、以下のようになる (p.293)。



それぞれの域のピッチが高域（６～３）・中域（５～２）・低域（４～１）となる[11]ことから、これは従来の１～５で記述する五度制の簡略化ではなく、さらに「６」の段を設けている点で精密化であるといえる[12]。この点は第３章２節 (pp.69-76) でも述べられているが、分析の妥当性は今後ともさらに議論の必要性があると考えられる。また、高域・中域・低域をどのような記号を用いて音声記述に反映させるのかについては解説がなく、残念であると言わざるを得ない。

3　読者への注意喚起

本書は、著者も認識しているように (p.32)、教科書として大きな問題がある。それは音声資料が付属していないことである。本書を独習することで調音音声学の訓練を積むのは相当の困難が伴うものである一方、教室で使うにしても具体的な音声現象を参照できないならば、教える側も困惑するところがある。また、発音方法の

[11]黄布凡 (2007) におけるチベット系諸言語の声調の記述において、発声を異にする初頭子音の声調の始点がずれる方言について各声調パターンを別個のものとして認め、複雑な声調体系をもつといった分析がなされている。このような現象に関して、本書の３つの域を分けて声調を分析するという方法を適用すれば、より明快に説明を与えられる可能性がある。

[12]なお、本書が掲げる「域」と言語の具体例について、北方官話北京方言、天津方言および粤語廣州方言は中域のみ、呉語上海方言は中域・低域の２種、湘語岳陽方言は高域・中域の２種、温州方言は３域すべてにわたる声調体系を有すると述べ、具体的な声調が図示されている (pp.294-297)。

習得のためのテクニックに関する記述も少ない。しかしながら、たとえ調音音声学の訓練が達成できないとしても、漢語の音声学用語の定義と名称や、アジア諸言語に広く見られるが国際音声字母に存在しない音標文字や枠組みの定義、また音節学という分析の手法など、類書には見られない豊富な内容に独習する価値がある。

そして、本書は漢語を中心にさまざまな音声現象を網羅的に扱っているが、それはあくまでも著者の知識の中で、と限定されて理解されなければならない。未記述言語は当然のこと、著者の知りえなかった言語においては本書に記述されない音やより厳密な用語による分類の必要性が存在する可能性があるということである[13]。たとえば、音標文字について言うなら、ビルマ語におけるビルマ文字 s に対応する音は、名称も音標文字も定まっていないものである[14]が、本書では扱われていない[15]。また、用語の問題点について言うなら、「緊喉」と呼ばれる現象に 16 種類の音声実現を挙げている (p.106) が、第 8 章の母音の解説 (p.259) には先の記述に含まれていない「咽頭化母音」や「+ATR」も〈緊元音〉として扱われていると述べており、一貫性に欠けている。特に「咽頭化」については、ナシ語（チベット・ビルマ系）の先行研究で咽頭化のような音声を「緊喉」と呼んだと考えられるものがある（黒澤 (2001)、鈴木 (2011b) 参照）ため、「緊喉」の多義に咽頭化を盛り込むことは必要であるだろう。調査研究が進むにつれこのような例がさらに多く出てくることは想像に難くない。仮に既存の音標文字で書くことのできない音に出会ったならば、新たに文字を定義する必要性があるだろう[16]。

また、本書はアジアの言語に特に注目するあまり、それ以外の言語できわめてまれに見られる現象で、かつ小泉 (1997) や Ladefoged (2006) など他の音声学の関連文献に言及のある現象が紹介されていないことがある。たとえば、第 6 章の「摩擦音」の関連個所 (pp.177-189) では咽頭壁摩擦音や咽頭蓋摩擦音について音標文字は言及があるが具体例と解説がない。前者はアラビア語などに見られ、後者はヘブライ語

[13]チベット系諸言語の事例について、本書に記述されない音声現象をまとめたものに鈴木 (2011c) がある。具体的には「前気音」や「r 化音の多様な音声実現」などが含まれている。

[14]評者はこの音を歯端閉鎖音という名称で呼んでいる。これはビルマ語以外にもポー・カレン語やゲーバー語（ともにチベット・ビルマ系）に認められる（加藤昌彦氏との個人談話 2012）ほか、カムチベット語 mBalhag 方言にも認められる。この調音の無声音を表す音標文字として、Suzuki (2011) は [ʈ] を提唱している。

[15]しいて言うならば、p.115 にある [t̪] という表記が近いのかも知れないが、本書ではこの記号が意味する舌部の調音位置を〈舌葉〉(laminal) としているため、その点については疑問が残る。

[16]新たな文字を定義するというのは 2 通りの場合があると考えられる。記述対象の言語のみにおいて音声記述の精密性を確保する場合と、多くの言語の記述で広く用いることを想定した音標文字の拡張を考える場合である。後者については、本書における一部の音標文字についてもいえることであるが、新たに文字を定義する場合、それを電子的に扱うために汎用性の高いフォント（たとえば unicode や LaTeX の metafont など）を設計する必要性もあるだろう（注 9 も参照）。各個人が外字を作成するのはきわめて非効率であり、互換性にも欠ける点が大きな問題として指摘されうる。

などに認められる。また、「長子音」の解説 (pp.204-206) において長さに２段階の異なりを認めるということを示しているが、たとえばエストニア語やサーミ語（ともにウラル諸語）には長さに３段階の異なりが見られる[17]。また、超分節音的特徴についても、声調の音声学的記述が中心で、強勢への言及はわずかである (p.273)。このため、評者は同書とともに Ladefoged (2006) など他の教科書も併用した学習が望ましいと考える。

著者の提供する IPA を超える細かい分類に対して「学ぶ必要性があるのか」と疑問に思う読者もいるかもしれない。しかし著者は、この予測されうる問いに明確に「必要である」との解答を示している (p.337)。本書は著者の知りうる限りの音声現象を記述できるよう、概念・体系・言語事実を与えているのであるから、本書を１つの基準として、記載のない音声現象を見出すこともこれからの一般音声学の課題である。現在の言語学界の中には、IPA はそもそも守るべき最低限度の規約といった性格のものとすべきところを、IPA の許容範囲で音声を記述しなければならないと認識している研究者が多く存在する。IPA と一般音声学は異なるという点で、音声記述を行う際に本書の理念は常に参考にされる必要性がある。

参考文献

黒澤直道 (2001)「ナシ（納西）語「緊喉母音論争」の意義—中甸県三壩郷白地方言に見られる音声現象からの考察—」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 61 号 241-250

小泉保 (1997)『音声学入門』大学書林

鈴木博之 (2010)「硬口蓋調音の多様性とその表記—雲南省のカムチベット語諸方言の記述から見た考察—」大西正幸・稲垣和也編『地球研言語記述論集』２, 107-113

—— (2011a)〈嘎嘎塘藏語的咽化元音與其來源〉《語言暨語言學》第 12.2 期 477-500

—— (2011b)「チベット・ビルマ系言語から見た「緊喉母音」の多義性とその実態」『言語研究』第 140 号 147-158

—— (2011c)《藏語方言語音研究對普通語音学的幾個貢獻》香港科技大学訪問講座發表論文（香港）

[17]Chalvin et al. (2011:6) によると、最近のエストニア語研究では３段階の子音の長さについて音素的な長さではなく超分節音的な性格のものと解釈するようになっているという。
また、子音の長短はその音声学的、物理学的長さのみならず、音節構造とからめて理解しなければならない側面もあるだろう。第６章「長子音」の項目で取り上げられている現象はすべて語中の例であるから、これを単純に音声学的長短のみで取り扱うのはやや問題がある。

内藤真帆 (2011)『ツツバ語　記述言語学的研究』京都大学学術出版会

Canepari, Luciano (1999) *Manuale di Pronuncia Italiana*, seconda edizione, Zanichelli

Chalvin, Antoine, Malle Rüütli et Katre Talviste (2011) *Manuel d'estonien*, L'Asiathèque

Ladefoged, Peter (2006) *A Course in Phonetics*, 5th edition, Wadsworth

Ladefoged, Peter & Ian Maddieson (1996) *The Sounds of the World's Languages*, Blackwell

Laver, John (1994) *Principles of Phonetics*, Cambridge University Press

Maddieson, Ian (1984) *Patterns of Sounds*, Cambridge University Press

Suzuki, Hiroyuki (2011) *Phonological idiosyncracies of mBalhag Tibetan (Yunnan, China) — A dialect in a thousand years of isolation —*, paper presented at Research Centre for Linguistic Typology Seminar, 9. December 2011 (Melbourne)

黄布凡 (2007)〈藏語方言聲調的發生和分化條件〉《藏語藏緬語研究論集》22-37 中国藏學出版社

孔江平、于洪志、李永宏、達哇彭措、華侃 (2011)《藏語方言調查表》商務印書館

林向榮 (1993)《嘉戎語研究》 四川民族出版社

張慧麗 (2010)〈主動發音器官模型與國際音標的幾個問題〉《語言暨語言學》11.4, 653-678

中國社會科學院語言研究所 (1981)《方言調查字表（修訂本）》商務印書館

朱曉農 (2006)《音韻研究》商務印書館

受領日　2012年5月16日
受理日　2012年8月28日